映像とコミュニケーション
――ルーマンとバルトの議論を手掛かりにしつつ――

1.「映像」の三つのコノテーション

「映像」は、

⑴「かたち」を持ち、

⑵またそれはオリジナルとしての「原像」のコピー、「模像」であり、

⑶「原像」としての〈実物〉と模像（コピー）としての「映像」は「類似」関係にある。

2. 映像の多重化的構造物としての世界

「映像」の概念には、その背後にオリジナルとしての「原像」がインプリシットに含意されており、「原像（Urbild）―映像（Bild）」という写像関係の一項を占めるものとして了解されている。

更に、この「原像―映像」関係は多重化、重層化され、「対象―知覚像」という写像関係を基準にしつつ、認識論的な場面においては、世界は「原像―映像」関係を機軸とする「映像」の多重化的構造物として把握される。

3.「錯図」としての「映像」

知覚風景は「もの」ではない（ましてや「映像」ではない）。それは明確な「輪郭（フリン）」＝「縁（ジン）」を持たず、またわれわれの身体の移動に伴って激変する、そして「心像」がそこへと定位される“地平”（Horizont）である。

自然的な知覚において生じる「映像」、すなわち「心像」と呼び慣わされてきた「イメージ」は、「原像―映像」という写像・模写関係というより、むしろ知覚風景という地平における「図―地」構造、“錯図”構造をその本質とする。

4. 自然的「映像」と人工的「映像」

・「心像」＝自然的な映像。

・メディア技術によって実現された写真・映画・テレビ・ビデオ＝人工的映像。

5. コミュニケーションの場面における「映像」メディア

人工的「映像」は、自然的「映像」（イメージとしての「心像」）とは異なり、制作者が介在している。自然的「映像」においては「主観」と「対象」との間ないし「自我」と「自然」との間での認知的関係、模写的関係に過ぎなかったものが、人工的「映像」においては、その関係に「他者」の契機が加わることで、「対象」への指示関係と同時に、「他者」による “メッセージ”あるいは“意図”が「映像」に付与され、対「他者」的“伝達”関係が構成される。

6.「フレーム」と「現場不在の現実性」

ルーマンによる「映像コミュニケーション」の特性。「映像コミュニケーション」においては、虚構性（Fiktionalität）と現実性（Realität）との、また知覚とコミュニケーションとの、二つの両義性が認められる。これを支える機制が「フレーム」（frame）と「現場不在の現実性」（Alibi- Realität）。

⑴「フレーム」（frame）･･･知覚風景内部に技術的に抉じ開けられた物理的な“窓”である「フレーム」を介した知覚風景への「映像」の“埋め込み”。

⑵「現場不在の現実性」（Alibi- Realität）･･･人工的「映像」の、現実の世界＝知覚風景とは異なる、情報によって組み立てられた “別世界”（Sonderwelt）“別の現実”（Sonderrealität）提示の機制。

両機制によって、“虚構”と“現実”とが相互的に浸透すると同時に、映像コミュニケーションが実際には「コミュニケーション」でありながら、「コミュニケーション」であることが不可視化され隠蔽される。

7. 映像と言語

ロラン・バルトによる　映像コミュニケーションにおける意味の三層の指摘。

・「第一の意味」（言語関与的）

⑴映像内部的な言語使用･･･「科白」「発言」

⑵映像外部における映像規定的な言語使用･･･「投錨（アンクラージュ）」（ancrage）と「中継（ルレ）」（relais）。

・「第二の意味」（言語無関与的な象徴的コード）･･･「スタイル」や「構図」、「背景的文化」。

8.「第三の意味」と身体性

・「第三の意味」･･･言語化をも表象化をも免れる“鈍い”（obtus）意味層。「コードなきメッセージ」（message sans code）。

おそらくは、この意味層こそが映像コミュニケーションの本質に迫る鍵を握ると同時に、情報社会の存立構造分析における要をなすもの。